

【講演会報告】

2019 年度講演会「伝統芸能の衣裳と機能性」報告

潮田ひとみ

東京家政大学家政学部服飾美術学科

1. 講演会概要

被服衛生学部会企画担当では、通常、2年に1回の公開講座を企画しているが、本年度は見学会・講演会を実施することとなった。今までは半期毎の申請であった親学会への助成申請だが、前年度の3月に申請する形に変更になった。そのため、企画立案は旧企画幹事だが、実行は新メンバーの企画幹事という変則的な開催となった。また、申請時には見学会・講演会を予定していたが、実施予定日であった10月12日が、台風19号接近に伴って文化学園博物館が休館となったため、延期開催となった。その際、見学会として予定していた「能装束と歌舞伎衣裳」展は11月29日までの展示期間であったため、見学会は実施できず、講演会のみを12月14日に実施することとなった。

「伝統芸能の衣裳と機能性」講演会は、2019年12月14日（土）、文化学園大学A館15階A153教室にて開催された。

2. 講演1

まず、染色文化史の第一人者である共立女子大学教授長崎巖氏に「日本の芸能衣裳—能と歌舞伎を中心に—」のタイトルで、装束・衣裳といった用語の使い分け、身分制度と衣裳の機能性との関連について貴重な資料を用いながらご講演いただいた。

伝統芸能は日常の衣服とつながりを持っており、身分制度と関連する。支配階層の衣服には機能性がなく、機能性がある衣裳を着用するのは庶民である。このことが芸能衣裳にも目に見える形で反映されている。

舞楽は、平安時代の公家装束を着用する芸能であり、優雅であるが、能は、室町時代の武家と一部の裕福な町人のためのものであり、武家服飾をもちいた装束である。歌舞伎は江戸時代の町人と一部の武家女性のためのものであり、町人服飾を用いた創作的衣裳である。これらの衣裳の違いは

それぞれの芸能の支持層を反映したものであり、異なる時代に異なる階層の指示を受けて芸能としての様態と特徴が確立されたとのことであった。

狂言と武家服飾との関係については、狂言の衣裳には染め物が用いられ、素材としては平織の麻が用いられたこと、また、歌舞伎では市松模様のように日常衣裳へのフィードバックが行われていた。

これらの理由は、染め物と織物では染め物の方が格下であるためで、同じ芸能衣裳であっても能装束と歌舞伎衣裳・狂言衣裳とでは素材や織が異なることなど、芸能においても身分制度の違いがもちこまれていたことが示された。



3. 講演2

次に、文化学園大学教授佐藤真理子氏による「和装の機能性を考える—伝統的所作と衣服—」のタイトルで、和装装着時の筋活動、三次元動作解析、衣服圧と姿勢の関係などについてご講演いただいた。

着物は身体を包み帯で締めるという平面構成の衣服であること、歩行特性としては、着物着用時には大腿二頭筋・腓腹筋の筋負担が大きいこと、着用時の拘束性としては、帯を締めることで僧帽

筋への負担が軽減され、動作時の筋活動を助け、体幹部の安定性を高めることが実験結果から示され、和装は姿勢の保持を助け、動作時の筋負担を軽減していることが明らかになった。



4. おわりに

参加者は家政学会会員 30 名のうち、21 名が被服衛生学部会会員であり、会員にとっても伝統芸能とそれらの衣裳との機能性について理解するための有用な研修の機会となったと思われる。また、家政学会会員以外の 13 名の方々にとっても、新たな視点から伝統芸能を学び、被服衛生学の意義について理解していただける貴重な機会となり、講演終了後にも演者に熱心に質問する様子や感想を述べる様子が見受けられた。

最後に、開催に関する諸々や、日程変更・種々のトラブル対応に関して、文化学園大学関係者の皆様には大変にお世話になりました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

<連絡先>

〒173-8602

東京都板橋区加賀 1-18-1

東京家政大学家政学部服飾美術学科 潮田ひとみ

電話・FAX：03-3961-8568

eメール：ushioda-h@tokyo-kasei.ac.jp